

# 近世大宮町の形成過程

田中 達也

## I はじめに

秩父大宮は、各種の商店や行政施設が集中する秩父盆地の中心地であり、秩父盆地随一の規模を誇る市街地を形成している。秩父大宮から各方面に向けて交通路が拡散し、峠を越えて他地域へ結びついている。そのため、近世から、秩父大宮はあらゆる方面からの人や物資の集散地となっていた。とくに、近代以降は、秩父セメントや秩父銘仙といった産業が秩父大宮やその周辺地域において成長し、それとともに秩父大宮はその中心性を高めていった。

秩父大宮の歴史は、現在の市街のほぼ中央部に鎮座する秩父神社(妙見社)とともにあった。秩父神社は、延喜式にも秩父郡二座の一つとして記載される古社であり、秩父郡の鎮守として位置づけられ、秋の大祭には秩父郡中から参拝者を集めていた。しかし、秩父神社の膝元にある大宮町の起源に関しては、現在までのところ必ずしも明らかにされているとは言い難い。これは、町が形成された時代の文書史料に恵まれていないことに起因するものと思われる。

近年では、都市史の分野で近世市町に対する関心が高まり、とくに東国における近世市町を事例として、町割・屋敷地割の復原という歴史地理学の手法を用い、その形態的特徴や変容過程を詳細に分析し、近世市町の空間的特質や中世から近世への町の変化を考察した研究が行われてきた。例えば、伊藤裕久は、会津盆地における市町を事例に、町の段階的な拡大の様相、市の開設を前提とした町の空間的特質、中世市町と近世市町の差異を復元的に提示した<sup>1)</sup>。

本報告では、近世大宮町の形成過程を明らかにすることを目的とするが、その際、上記の手法に学びつつも、とくに近世初頭における大宮町の構

成員に注目し、町の形成に中心的な役割を果たした者の出自や社会的性格の分析を、町の形成過程を解明する手段としてみたい。なぜなら、従来の市町の形成過程についての研究では、この点に関して比較的十分な検討がなされていないと考えられるとともに、文書史料にめぐまれない大宮町において、この分析が文書史料の欠如を多少なりとも補い得ると考えるからである。

## II 大宮郷と町の景観

### 1) 中世における秩父地方と大宮郷の動向

本論に入る前に、大宮郷の存在する秩父地域の歴史の変遷と大宮郷の動向について概観する。大宮郷の語源となった妙見社は、中世から秩父郡の鎮守として位置づけられており、鎌倉時代には妙見社の宮本地頭であった丹党中村氏の下に、郡内各地に割拠する郷地頭が位置する郡秩序が確立していたとされている<sup>2)</sup>。当時の大宮郷は、中村氏をはじめ、郡内各地の郷地頭の居宅も設けられ、秩父郡の中心となる政治都市として存在していたとする見解もあるが<sup>3)</sup>、その具体像については未だ不明である。

南北朝期以降、戦国期に至るまでの秩父郡や大宮郷の動向も、先行研究が少なく、必ずしも明らかではない。大宮郷の周辺に焦点を絞ると、文明7年(1475)に勃発した長尾景春の乱において、秩父郡は長尾景春の有力な根拠地となった。そのため、文明12年(1480)には、大宮郷周辺が長尾景春に対する太田道灌の攻撃の舞台となった<sup>4)</sup>。大宮郷にほど近い黒谷(秩父市黒谷)や日野(荒川村日野)には、長尾景春の居城という伝承を残す城跡が存在している。また、大宮郷の東隣である山田(秩父市山田)には、長尾景春の家臣であったと伝えられる山田志摩守の居館跡が存在する。同様に、

大宮郷の南隣である影森(秩父市影森)にも、長尾景春の家臣であった滋野刑部が居住したという「長者屋敷」跡が存在する。滋野刑部に関しては、子の帯刀が農民となり大宮郷に移転したが、後に故あって退転したという伝承も残っている<sup>5)</sup>。さらに、中世における名主層とみられる家で「ナガオ(長尾)様」という小祠を祀っている事例が三沢谷(皆野町三沢)にみられる<sup>6)</sup>。以上のことから、大宮郷の周辺は長尾景春の有力な拠点であり、大宮郷もその影響を強く受けたものと推定されるが、当時の大宮郷の実像を長尾氏やそれに属した者たちの動向に照らしつつ解明する試みは、本報告の直接の目的ではないため、後日に期したいと思う。

戦国時代末期になると、秩父郡一帯は天文15年(1546)における川越合戦での勝利を契機に武蔵国北部へ進出した後北条氏と、盛んに関東への進出を試みた武田氏、さらには上杉氏との間で激しく帰属関係が変転した。永禄3年(1560)の大宮合戦は<sup>7)</sup>、こうした各勢力の衝突が激しい形で現出したものであり、大宮郷もその渦中にあったことを示している。また、大宮郷の寺社には、武田氏の侵攻によって焼き払われたことが「武田焼き」という伝承として残っている事例もある<sup>8)</sup>。このことも、当時の大宮郷が不安定な政治状況下にあったことを示すものである。大宮郷周辺の村落には、武田氏の侵攻の際に甲斐国から移住したという伝承をもつ家と、後北条氏の家臣であったという伝承をもつ家が併存している事例がまみられ<sup>9)</sup>、大宮郷にも、戦国期に甲斐国から移転したという家が各所に存在する<sup>10)</sup>。これらの事例は、当時におけるこの地域の両属的な状況や、外部からの人の移転が活発であったことを示すものである。

天正10(1582)年に武田氏が滅びると、大宮郷周辺にも一応の政治的安定がもたらされ、後北条氏のこの地域に対する支配が確立された。天正18年(1590)の後北条氏の滅亡以降は、徳川氏がこれを引き継ぎ、近世を迎えることになった。

## 2) 近世初期における町と村落の景観

近世における大宮町とその周辺村落はいかなる自然条件下にあり、どのような景観を呈していたかを考察する手がかりとするのが、第1図にあげた元禄3(1690)年の大宮郷絵図である<sup>11)</sup>。

近世の大宮郷は、大宮町とその周辺に散在する大部分が10戸未満の小集落によって構成されていた。大宮郷が立地する荒川右岸は、階段状に複数の河岸段丘面が存在しており、各段丘の境目には、所々に湧水が存在していた。こうした段丘崖の湧水点は「ハケ」と呼ばれ、「旗の下(はけのした)」という地名にもなっている。各段丘面は荒川上流の南西から下流の北東に向けて緩く傾斜しているため、各「ハケ」より湧出した湧水は北東方面に流れだしていた。「ハケ」より湧出する湧水は、生活用水として利用可能であるばかりでなく、流域にそれを用水源とする小規模な水田の開発が可能であった。そのため、「ハケ」となっている場所は、集落が立地しやすい条件にあった。また、大宮郷東部の丘陵山麓にも所々に湧水点が存在し、こうした所にも「ハケ」と同様に集落が営まれていた。前者の事例が旗の下を始め、中村・近戸・金室・阿保など主に下位の段丘面に立地する集落であり、後者の事例が宮地に存在する小集落や熊木・野坂の集落であった。

これらの集落の要となった湧水の近辺には、宮地の虚空蔵堂(写真1)・諏訪社のように宗教施設が立地する事例もあった。大宮の母体となった妙見社に近辺にも、「七つ井」がある<sup>12)</sup>ことから、この地域における集落の立地に関して湧水が重要な役割を果たしていたことがわかる。

「ハケ」を中心に成立した集落と土地利用の様相を知るために、中村・近戸集落を具体的な事例としたのが第2図である。これより、段丘末端部に宅地が集中し、宅地に隣接した崖下には湧水点为数か所存在したことがわかる。特に中村集落の場合には、湧水点を集落の中心であった井上氏の本家筋が押さえており、湧水点を核として集落が形成されていったことを示している。下位の段丘面に展開する水田の地名は「井戸尻」であり、段丘崖から発する湧水が用水源となっていたことを

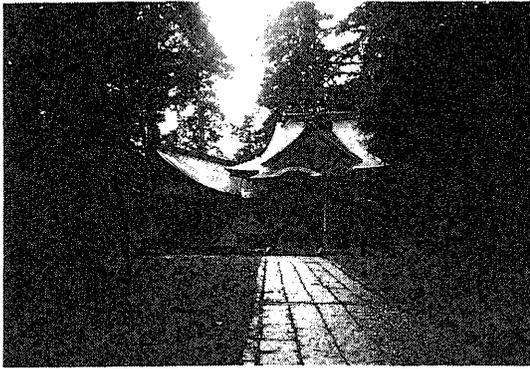


写真1 虚空蔵尊  
(平成7年6月撮影)

示している。この水田は中田・下田によって構成されており、上田はほとんど存在していない。これより、水田の生産力はそれほど高くなかったと考えられる。一方、宅地と同じ段丘面には水田はなく、畑地が広がっていた。こうした中村・近戸の事例は、「ハケ」を中心に成立した小集落の景観の典型であったと考えられる。

次に、大宮町の立地と形態について検討する。元禄絵図における大宮町一带をとりあげたのが第3図である。大宮町の町並みは、南東から北西へと走る直線道路を機軸に、両側に屋敷地が展開しており、北から下町(もとまち)・中町・上町の3つに分けられていた。町並みの機軸となる直線道路から垂直に派生する横道のなかには、十七夜横丁、天王横丁、東横丁といった名称がつけられているものもあった。元禄期にはこうした横丁に沿っても町並みが形成されていた。

大宮の町は、中位の段丘面上に立地していた。町の北西部は段丘崖に接し、「ハケ」と同じ立地環境にあるため、所々に湧水がみられた。この湧水もまた生活用水として利用されたほか、酒造用として利用され、水神などの小祠が祀られることもあった<sup>13)</sup>。しかし、上町の中央より南にいくにつれて、町並みと段丘崖は接しなくなるとともに、段丘崖も明確ではなくなっていく。

第3図をみると、町並みのほぼ中央部の東側に忍藩の陣屋が存在していたことがわかる。大宮郷

が忍藩領となったのは寛文3年(1663)であったが<sup>14)</sup>、陣屋はそれ以前の直轄領の時代から同じ場所に存在していた<sup>15)</sup>。また、絵図には大宮町の周辺に複数の宗教施設が描かれている。なかでも、妙見社と八大権現社(今宮坊)は、広い御朱印地を有していた。陣屋とともに町並みのほぼ中央に位置する浄土宗惣門寺は、町に居住する割役・名主の会所として利用されていた<sup>16)</sup>。

近世の大宮町は月に6回、1と6のつく日に市が立つ六斎市が開かれていた。上町は1日と21日、中町は6日と16日、下町は11日と21日というように、六斎市と3町は対応関係にあった。また、各町の市が割り振られた範囲は、6日町や21日町など、それぞれの市日の名を冠した町名として定着していた<sup>17)</sup>。

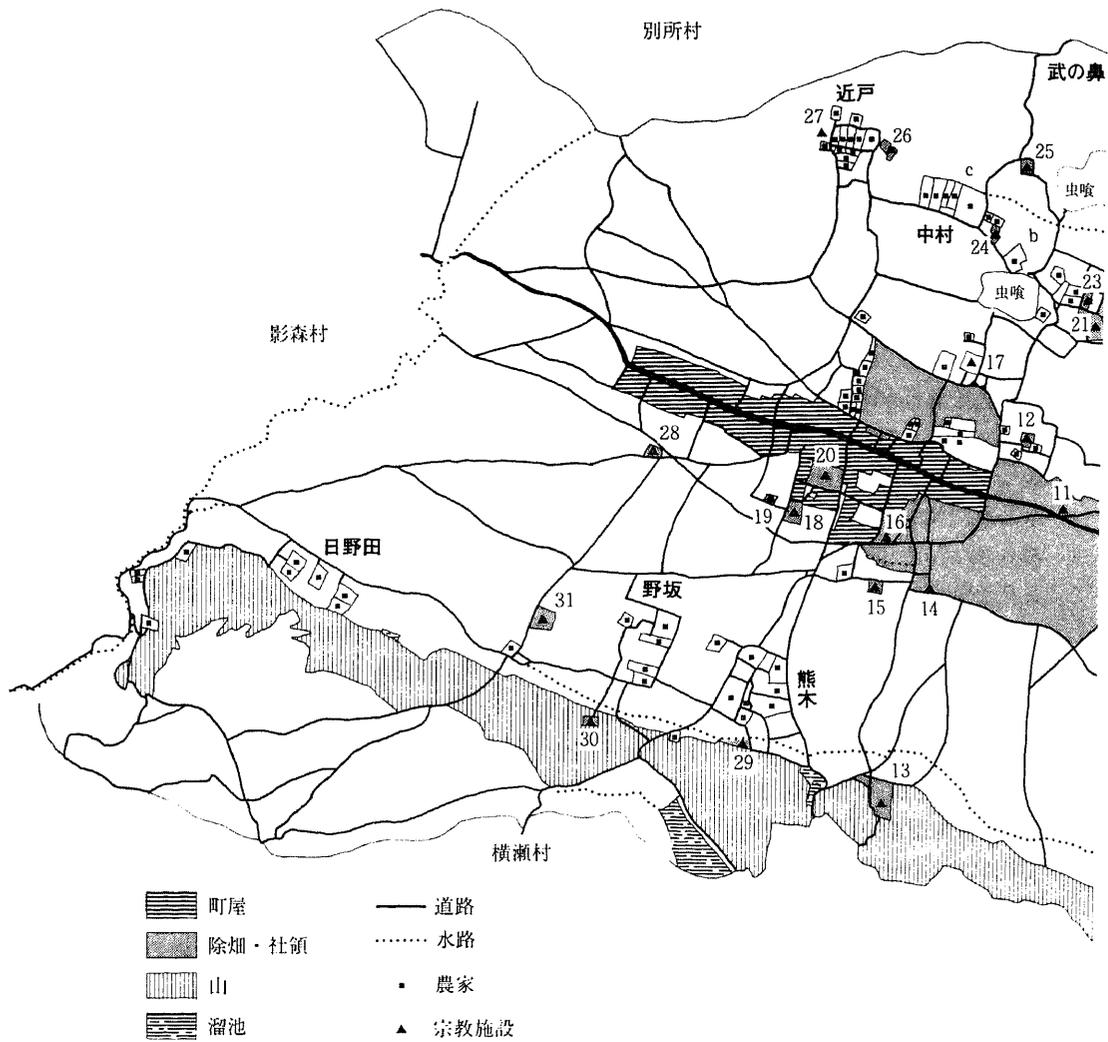
各町における地割の形態をみると、各屋敷の間口・奥行は必ずしも一定せず、各町ごとに異なる特徴を見いだすことができる。すなわち、下町は、間口に不均衡がみられるものの、奥行はそれほどばらつきがみられない。中町は3町のうちで最も間口・奥行ともにばらつきがみられる地域となっており、その傾向は特に中町の西側で顕著である。上町は、北半分で多少奥行のばらつきがみられるものの、南半分は3町のなかで最も規格化された奥行の屋敷地割を有している。このことは、各町ごとに成立事情・時期が異なる可能性があることを示唆するものと思われる。

地割の形態とならんで3町の差異を示すのが、町名主の居住地である。元禄期の状況を第3図にみると、町名主の居住地は下町に集中していたことがわかる。また、中町と上町に居住する名主は、陣屋の付近に比較的集中していたことも一つの傾向として指摘できる。これらの事実にも、町の形成と展開に関わる何らかの要因が存在するものと思われる。

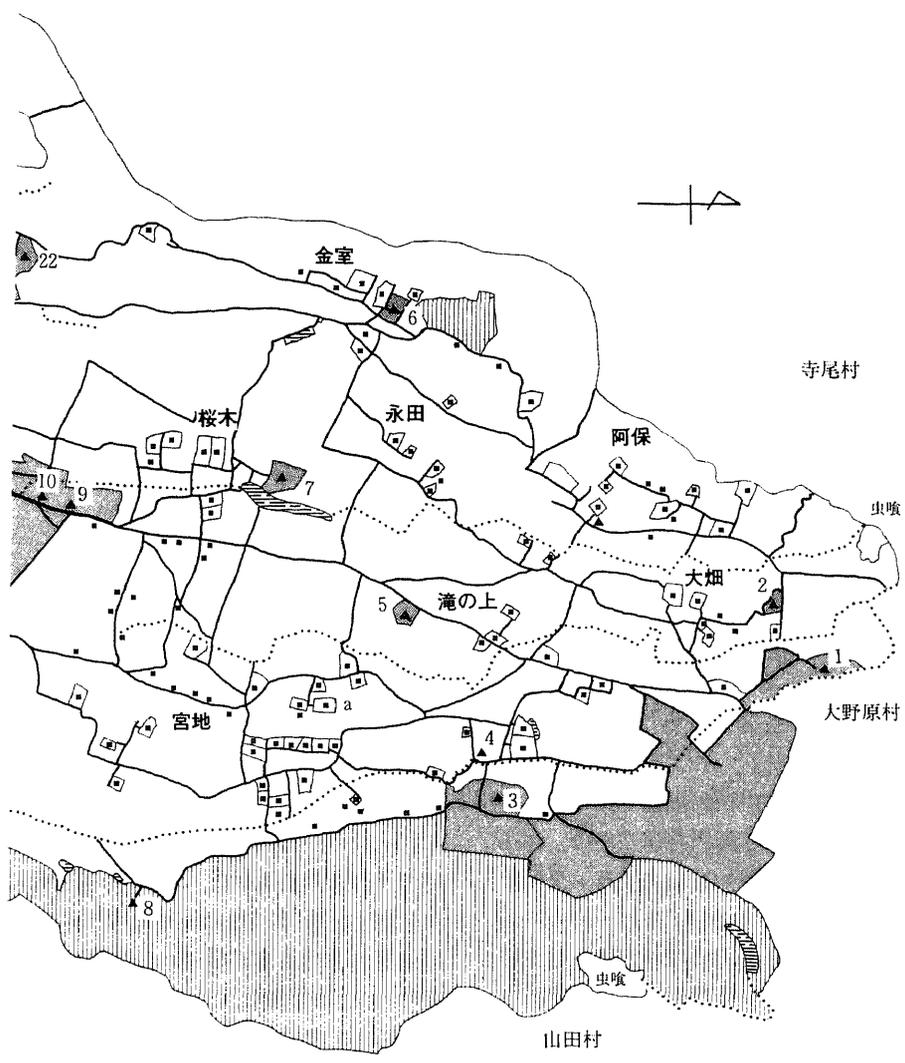
### Ⅲ 大宮町の形成と発展

#### 1) 妙見社と下町

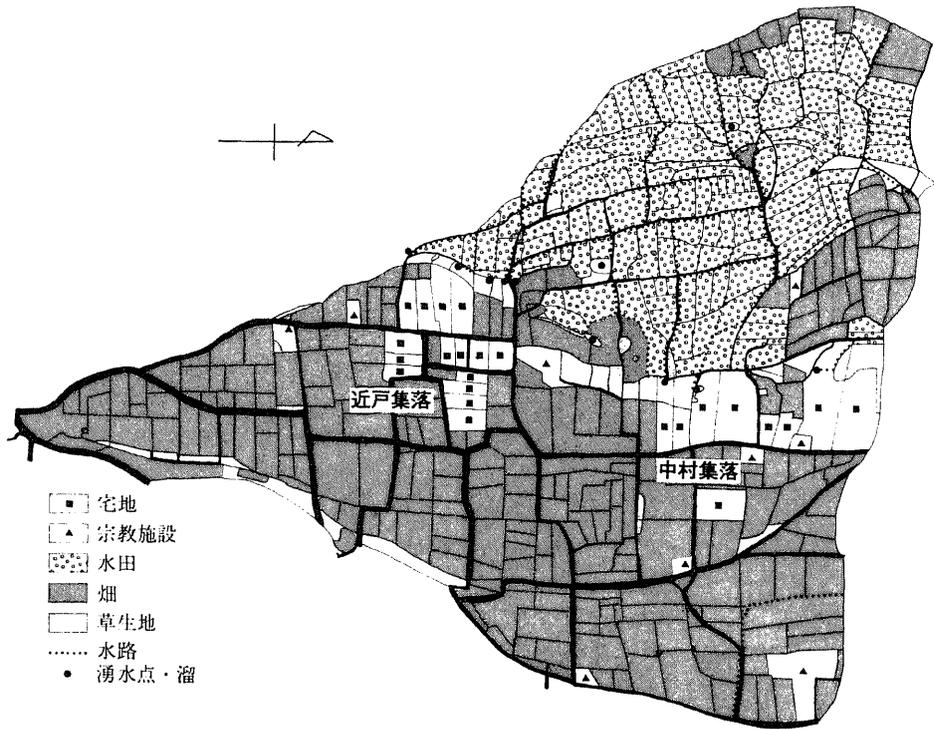
大宮町の存在とその構成員が知れる最古の史料



- |           |             |            |
|-----------|-------------|------------|
| 1 宗福寺     | 13 十一番坂氷観音  | 25 薬師堂     |
| 2 龍石寺     | 14 十五番観音蔵福寺 | 26 丹生明神    |
| 3 見東院     | 15 常楽寺      | 27 地藏院     |
| 4 十八番観音   | 16 諏訪       | 28 山の神     |
| 5 愛宕      | 17 爪龍寺      | 29 諏訪      |
| 6 薬師堂     | 18 慈眼寺      | 30 稲荷      |
| 7 十七番観音林寺 | 19 十三番観音    | 31 野坂寺     |
| 8 虚空蔵     | 20 惣門寺      |            |
| 9 薬師堂     | 21 十六番観音西光寺 | a 名主 四郎左衛門 |
| 10 阿弥陀堂   | 22 万福寺      | b 名主 平左衛門  |
| 11 稲荷     | 23 天神       | c 名主 半左衛門  |
| 12 南学院    | 24 天神       |            |



第1図 元禄期における大宮郷の景観  
 (松本家文書「元禄絵図」より作成)



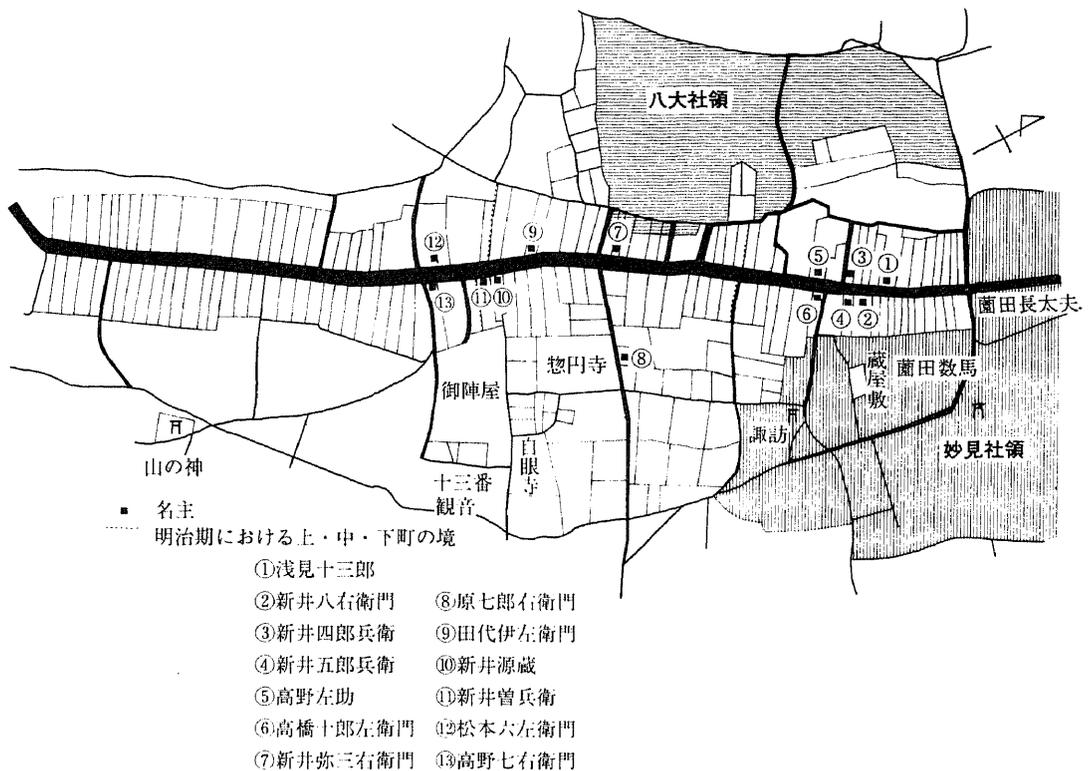
第2図 明治初期における中村・近戸の土地利用  
 (秩父市立図書館蔵「中村・近戸絵図」より作成)

は、天正20年(1592)の妙見社棟札である<sup>18)</sup>。そこには、神主の蘭田刑部左衛門秀満を始め、河田備前守・新井三郎左衛門尉・河田主膳首・黒崎隼人佐・河田五郎左衛門尉・河野図書助・阿佐美庄左衛門尉・市川二郎右衛門尉の名が記載されている。このうち、新井三郎左衛門尉は「町太郎」と称されており、当時の大宮町の頭役であったと推察される。

戦国末期から近世初頭における大宮町の様相を示すもう一つの史料は、延享2年(1745)に作成された「由緒書」<sup>19)</sup>である。ここに、「妙見十騎」と称され、妙見社護持の中心となった家についての記述がある。妙見十騎を構成するのは、関根・新井・高野・井上・志田・高橋・雨宮・根岸・川田・市川の各氏であった。また、原・横田氏を加えて「十二役人」と称し、社役人として近藤氏をあげている。さらに、下町の新井家の祖である新

井織部が、十騎の会所である花見堂を取り立てたと記載されている。妙見十騎の構成員のうち、新井・川田・市川氏は、天正20年の棟札にも名を連ねており、特に、天正20年の棟札において「町太郎」と称される新井氏は、由緒書においても十騎の中心的な役割を果たしていたことが注目される。

天正20年当時の大宮町の様相や、妙見十騎の起源とその地盤を明らかにする手がかりは、由緒書において「広見庵」として記載される広見寺である。広見寺は宮地に存在し、明徳年間(1390~93)の創立と伝えている。広見寺の門前には妙見堂が存在し、妙見社の神主である蘭田家も檀家であったことから、妙見社と深い関係を有した寺院であったと考えられる。寺が存在する宮地は広見寺の主要な地盤であり、大部分の家が広見寺の檀家である。その他に、大野原の高橋家、黒谷の内田



第3図 元禄期の大宮町  
 (松本家文書「元禄絵図」より作成)  
 注) 町家の範囲は第1図を参照。

家、上田野の諸(毛呂)家、日野の浅海家など、周辺各村の名主クラスの家が広見寺の檀家であった。さらに、大宮町においては、広見寺の檀家は下町に集中していた。

妙見十騎のうち、関根・新井・高野・高橋・雨宮・根岸・川田・市川の各家、さらに横田・近藤家が広見寺の檀家であった<sup>20)</sup>。また、天正20年の棟札に記載されている浅見氏も広見寺の檀家であった。これらの檀家の居住地をみると、上宮地に関根・雨宮、中宮地に関根・新井・根岸・近藤・浅見、下宮地に浅見、下町に新井・高野・高橋・市川・横田・浅見の各家が存在しており、宮地もしくは下町に集中していたことがわかる<sup>21)</sup>。

由緒書は、「夫当地宮地之元根」という書き出しではじまっており、宮地の由来と妙見社との関

わりについて記載されたものである。妙見十騎の会所とされる花見堂は、現在も中宮地に存在する(写真2)。こうしてみると、宮地と下町は、妙見社の膝元として、一体となって妙見社を支える中心となっており、同時に広見寺の地盤ともなっていたと考えられる。

妙見十騎とされる家は、居住する各地区において広見寺の世話人となっており、これらの家によって広見寺の主檀家が構成されていた。また、これらの家のなかには、広見寺を檀那寺とする以外に、墓地の存在する墓地寺をもっている事例がみられる<sup>22)</sup>。事例をあげると、下町の浅見家が爪龍寺、高野家が滋眼寺、宮地の関根家も爪龍寺を墓地寺としている。また、下町の新井家は、東横町にある惣門寺の檀家であるが、近世初頭には

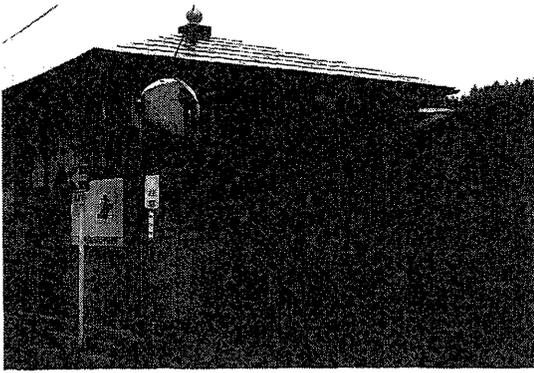


写真2 花見堂  
(平成7年6月撮影)

広見寺の檀家でもあった。こうした関係は、周辺村落の名主層にもみられる。事例をあげると、大野原の高橋家は源蔵寺、日野の浅海家は浄光寺を開いている<sup>23)</sup>。

墓地寺の成立事情を示す事例として、高野家の墓地寺である滋眼寺がある。万治2年(1659)の「年恐書付を以申上事」には、次のような記載がある<sup>24)</sup>。

一、秩父大宮町御陣屋裏はけの下村満光庵住寺ニ御座候、先年ハ町之久右衛門地庵ニ御座候所、当廿五年以前亥ノ大宮御繩入之節、先与兵衛様・富田吉右衛門様御相談ニ而寺中御指置ニ被遊被下候、寺ノのき下ニたて拾間余横三間之石塚ニ木々立申候を田地ニ付候間、寺へ付候へと御意承及候事

この記載より、滋眼寺(満光庵)は久右衛門(高野氏)の地庵(持庵)として始まったことがわかる。これより、墓地寺は、戦国期からの系譜を引く、大宮町や周辺村落の有力者の庵を起源とするものであったと考えられる。

広見寺に残る過去帳には、天正20年の棟札や由緒書にみられる名字が所々に記載されている。第一に注目されるのは、明応6年(1497)の「新井織部祖父」という記載である<sup>25)</sup>。これより、由緒書に登場する新井織部は、戦国期に実在した人物であることがわかる。また、過去帳には、永禄4

年(1561)に「雨宮兵左衛門」、元亀3年(1572)に「関根五右衛門父」、天正3年(1575)に「井上平左衛門」、慶長2年(1597)に「高橋与左衛門」という記載もある。以上の事例は、妙見十騎が戦国末期には組織されていたことを示している。

惣円寺の記録によると、宝永2年(1705)に「宿太郎 新井八右衛門」が没したとされている。新井八右衛門は元禄絵図にも名主の一人として記載されており、天正20年棟札における町太郎の系譜を引く者であったことがわかる。この新井八右衛門こそ、新井織部の末裔であろう。また、元禄絵図において名主として記載され、下町に屋敷を有する高野家の系図<sup>26)</sup>には「高野図書助」という記載があり、天正20年の棟札における「河野図書助」と同一人物である可能性が高い。さらに、川越の商人であった榎本弥左衛門の覚書<sup>27)</sup>には、寛永20年(1643)の記載中に「大宮町年寄浅見忠左衛門」とある。この浅見忠左衛門もまた、天正20年棟札における阿佐美氏の系譜を引く者であり、元禄絵図における浅見十三郎の先祖と考えられる。

以上より、近世の下町の起源は、戦国期にまで遡れるものであると考えられる。元禄期に名主が集中し、大宮町全体の中心となっていたのも、これに由来するものであろう。また、戦国期の大宮町は、妙見社の門前町的な性格をもち、宮地と密接な関係にあったと考えられる。

## 2) 町屋の移転と中町

この地域における戦国期の町は、妙見社の門前町的な様相を呈していたと考えられる下町のみであったのであろうか。『新編武蔵風土記稿』の横瀬村の項には興味深い記載がある。それは、横瀬村の字「寺坂」に横瀬六郎左衛門の屋敷跡があり、屋敷続きの字「今市」という所には町屋があつて市が立った。横瀬氏の廃絶後に、今市の町屋は大宮郷に移ったというものである<sup>28)</sup>。今市の白山社(写真3)には、神体として文安2年(1445)銘の宝塔が存在するほか、板碑も残存している<sup>29)</sup>。白山社宝塔は、今市に居住していた人々が、大宮郷

に移転する際に残していったものと伝えられている。この宝塔の存在は、今市において室町時代に町屋が営まれていた可能性があることを示している。

今市に存在した町屋の移転先である大宮郷にも白山社が存在する。この白山社の祭りに際して重要な役割を担っていたのは、中町に居住していた久保家であった。久保家は、白山の祭りを主催し、

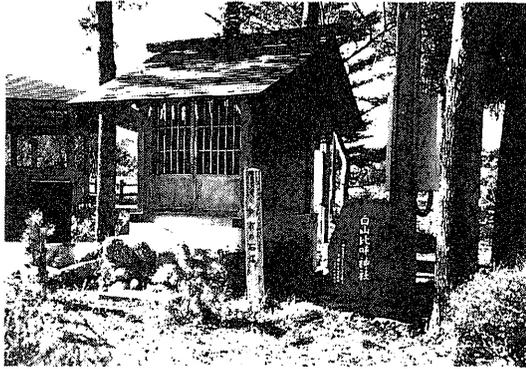


写真3 白山社跡(横瀬今市)  
(平成8年1月撮影)

武甲山に所有する山林から旗竿を伐ってのほりをあげていた。また、白山社の氏子を移転させたのも久保家であるとされている。このことは、今市の町屋の大宮郷への移転を主導したのが久保家であったことを示すものと考えられる。

久保家は、近世を通じて割役・名主をつとめ、中町の中心となっていた。久保家は、中町に4軒あり、それぞれ「久一」「久二」「久三」「久庄」と呼ばれていた。このうち、「久一」「久二」「久三」については同族関係にあり、「久一」が本家筋とされているが、これら3家と「久庄」との関係は不明である。元禄12年(1699)の「寅年酒造高半分造高之覚」<sup>30)</sup>には、大宮郷の市郎兵衛(「久一」家)の酒造高として29石6斗5升が記載されているが、これは大宮郷では長太夫(蘭田家)の35石5斗に次ぐものである。ここに、久保家の経済力の一端があらわれている。

久保家において執り行われてきた年中行事を記

録した天保2年(1831)の「勝手年中行事」<sup>31)</sup>には、荒川の渡し場が存在した「武の鼻」に拠点をもつ船頭に、かつては久保家が春と秋に大麦を5升ずつ給していた。しかし、12、3年前にその得点が中村の井上休左衛門に移ったと記載されている。久保家が交通の結節点に位置する職能民を掌握していたことは、久保家が流通に関与し、商品の輸送を掌握していた姿を思い描かせるものである。久保家がこうした権益をもっていたことが、今市から大宮郷の町屋の移転において久保家が主導的な立場にあった要因であったと考えられる。

久保家の檀那寺である金仙寺に残る記録によると、「久一」家の初代は天正元年(1572)没とされている<sup>32)</sup>。一方、広見寺の過去帳にも、天正18年(1590)に「久保庄左 隠居」という記載がある<sup>33)</sup>。また、広見寺過去帳には、大宮郷の白山社に関しても、文禄2年(1593)に「白山先祖」という記載がある。これより、久保家は、戦国期には大宮郷に居住しており、今市の町場も戦国末期までには大宮郷に移転していたと考えられる。

今市から移転した町が、妙見の門前町的な性格をもった下町とは異なるものであったことは、棟札や由緒書に久保家が登場せず、宮地に久保姓が存在しないことから考えられることである。しかし、今市から移転した町の様相を示す手がかりは今のところ皆無である。一つの可能性として考え得る手がかりは、久保家と今宮坊の修験であった塩谷家との関係である。

近世の今宮坊は、本山修験に属し、八大権現社とその別当である今宮坊によって構成されていた。八大権現社は、文亀元年(1501)に再建され、今宮八大権現と号したと伝えられている<sup>34)</sup>。秩父札所についての最も古い史料である長享2年(1488)の「秩父観音札所番付」にも、今宮の聖観音が記載されている<sup>35)</sup>。それ以後、今宮坊の体裁は戦国期の間に徐々に整えられていった。天文4年(1535)に京都今宮神社より素戔鳴尊を勧請し今宮神社を創建し、永禄12年(1569)には長岳山今宮坊と称したとされている。

近代において、今宮神社の氏子は中町であり、

大宮町の中でも中町が今宮坊と深い関係にあった。今宮神社には、安政5年(1858)に中町中によって建立された常夜灯があることから、中町と今宮坊との関係は近世にまで遡れるものと思われる。また、元禄絵図をみると、下町と妙見社領が接しているのに対して、今宮坊領は中町と接しており、これも今宮坊と中町との関係を示唆するものである。

「久一」家は、今宮坊修験の塩谷氏と数度にわたって婚姻関係を結んでおり、中町のなかでも特に今宮坊と密接に結びついていた<sup>36)</sup>。先に述べた久保家の来歴を勘案すると、今市から大宮郷へと町が移転したのは、戦国期における今宮坊の整備と連動したものであり、中町は今市から大宮郷へと移転した町を母体とするものであった可能性があると考えられるのである<sup>37)</sup>。

### 3) 町の整備と拡大

下町・中町とならんで、近世における大宮町を構成するもう一つの単位に上町がある。第1節で紹介した由緒書には、上町は「新田」と記載されており、下・中町とは起源が異なる町であり、上町が前2者よりも新しく成立したものであることは既に指摘されている<sup>38)</sup>。「新田」についての史料上の初見は、現在までの調査の結果では、明暦元年(1655)の「武州秩父郡横瀬郷御検地水帳」に記載される「新田町 彦八郎」である<sup>39)</sup>。

「新田」の成立について考察を加える前に、「新田」となった場所が近世以前にいかなる状況にあったかを考えてみたい。上町に居住し、割役・名主を勤めた松本家には、次のような伝承が残っている。

元来この地には、四百年余の昔未だ松本家が秩父に移り住む以前、静野某という豪家がいて酒を造っていた。しかし、故あって静野家は欠所となり、その跡を松本家の祖先が継承した。そこに祀られている業仁安様は、静野氏が酒を造る良水を求めて井戸を掘ったところ、滔々と流れ出る真清水を得、この霊水の恵みを神に謝して祀ったのが始まりである<sup>40)</sup>。

この伝承に登場する静野氏は、惣円寺の由緒にも登場する。それは、惣円寺の寺地は元々は閑野帯刀の屋敷地であり、寺を建立する際に閑野帯刀から屋敷地を譲り受けた。その縁で、閑野帯刀は惣円寺の開基となったというものである。さらに、閑野帯刀は秩父を離れた後、佐渡に渡って鉾山の水抜き技術者となったと伝えられている<sup>41)</sup>。

閑野帯刀について、天正14年(1586)の北条氏邦印判状に、閑野帯刀の知行地に欠け落ちした5人のうち2人を、元来の居住地である阿那志(群馬県美里町阿那志)へ還住させる指示が出されている<sup>42)</sup>。また、天正10年(1582)の秩父衆書上においても、閑野平左衛門という人物が2人の軍役を負担している<sup>43)</sup>。以上より、閑野氏が戦国期に実在したことがわかる。

戦国期の北条氏の支配地域において、欠け落ちした百姓の処置に関する史料は所々にみられる。この点について、当時における広範な地域での開発の進展と、それにともなう労働力の必要性が、他所から百姓を募集して開発労働力を確保する動きを引き起こし、移動した百姓の帰属をめぐる争いが頻発したことが指摘されている<sup>44)</sup>。閑野帯刀の知行地に外部から人が流入していたことは、戦国末期に閑野帯刀が近世の大宮町が立地する段丘面の開発に着手し、大宮郷に居所を定めたことを示すものと考えられる。その際、閑野氏は、段丘縁辺部の湧水点を占拠し、開発の拠点としたのであろう。また、閑野氏も久保家と同様に、妙見社とは関わりをもたない存在であった。広見寺過去帳にも、閑野氏に関する記載はみられない。このことは、閑野氏が下町の構成員とは異なる出自をもつものであったことを示している<sup>45)</sup>。

閑野氏が秩父から離れた後、惣円寺の中興開基となったのが長谷部家であった。惣円寺にある長谷部家の墓所には、「承応二年(1653) 長谷部主計」という墓石が残っている。また、長谷部氏は原・井出氏と同族であったと伝えられており、長谷部氏の墓所には、「慶長二年(1597) 原■■■」「元和七年(1621) 原兵庫」という記載のある五輪塔が残っている(写真4)。長谷部・原・井出氏は、

戦国末期に閑野氏が開発に乗り出した際、閑野氏とともに土着した者であったと考えられる。

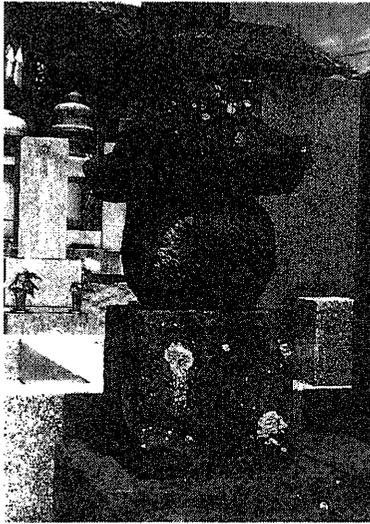


写真4 原家の五輪塔（惣門寺）  
（平成7年6月撮影）

閑野氏の大宮郷からの落居と、新田町の成立とは関連した事象であったと思われる。なぜなら、上町の成立は、六斎市の開催を念頭に置いたものである側面が強く、閑野氏の落居も、六斎市の開設を主導する代官による政策的な措置であったと考えられるからである<sup>46)</sup>。閑野氏の屋敷を継承し、元禄絵図でも上町においてひときわ広い屋敷地を有した松本家は、遅くとも寛文10年(1670)には割役を勤めており<sup>47)</sup>、新田町の成立とともに移転した可能性が高い。

近世初期の大宮郷において、町の形態を確定する画期となったと考えられる出来事が幾つかある。その最初が、妙見社と八大権現社(今宮坊)の御朱印地が確定した天正19年(1591)である。その際、妙見社は57石、八大権現社は10石の御朱印地を与えられ、近世を通じて変化することはなかった<sup>48)</sup>。妙見社領と八大権現社領は、両方とも下町の北端を一つの区切りとしている(第3図参照)。また、妙見社は下町の東側と接し、その南端は下町と中町の境を区切る天王横丁までとなっ

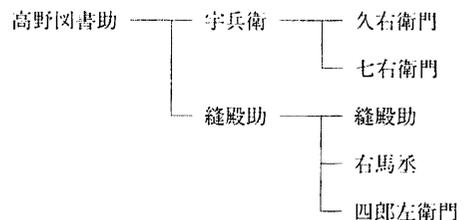
ていた。これに対して、八大権現社領は、中町の北西部と接し、中町の中央部から西に向かう横丁が南限となっていた。こうした町と社領の関係が成立した時期は、社領が確定した天正19年に求めることができる。下町の住人や中町の久保家の来歴を考慮しても、下町から中町中央部までの町並みは、天正19年までには成立していた可能性が高い。

その後、町の範囲を確定する画期になったと考えられるのが、寛永12年(1635)に大宮郷に施行された検地である<sup>49)</sup>。大宮郷の明細帳には、次のような記載がある<sup>50)</sup>。

屋敷九畝廿九歩 宿太郎 御指置  
回 一反四畝拾壹歩 六左衛門 右回断

この記載において、宿太郎の新井八右衛門とともに屋敷が除地とされていた六左衛門とは、上町の松本家のことである。屋敷地の除地が確定したのは、寛永12年の検地であったと考えるのが妥当であろう。これより、松本家は寛永12年には上町に居住していたことになり、上町もその時には既に成立していたと考えられる。

上町成立の時期を比定するもう一つの手がかりとして、下町に屋敷をもつ高野氏の分家創出過程がある。高野氏の分家創出の様子は、高野氏の系図によって知ることができる(第4図)。高野家は、元禄期頃までに5家に分かれていた。また、系図には、高野七右衛門が、父の高野宇兵衛を連れて別家したと記載されている。高野七右衛門の屋敷



第4図 近世初期における高野家の展開  
（「高野家系図」より作成）

は、上町の陣屋前にあった。これより、高野七右衛門の上町への分家は、陣屋の建設、上町の成立に際してのものであったと考えられる。

横瀬村の持山に存在した阿弥陀山念仏寺跡には、代官以下の役人や大宮郷の住人によって元和8年(1622)に作られた五輪塔があり、そこに代官伊奈半左衛門、代官所役人の富田吉右衛門などとならんで、高野七右衛門の名が記載されていた<sup>51)</sup>。このことは、遅くとも元和8年以前には高野七右衛門家が成立していたことを示している。また、系図によると、高野七右衛門の分家の際に七右衛門と行動をとにした宇兵衛は、元和元年(1615)没とされている。こうしてみると、陣屋の設置と上町の成立も元和元年以前にまで遡る可能性が高いと考えられる<sup>52)</sup>。

大宮町と同様に秩父盆地内に位置し、大宮町や盆地内の他の町とともに定期市場網を形成していた小鹿野町の、代官の主導による町立が慶長初年であると考えられることから<sup>53)</sup>、上町の成立も小鹿野町の町立と同時期のものではあったと考えられる。

しかし、元禄絵図をみると、上町は下・中町と比して長い町並みを有していたことに気づく。上町の北端から、下・中町と同じ長さをとると、ほぼ上町東側の屋敷の奥行きが急に変化する地点となる。それ以南の規則的な奥行きは、上町西側にも存在する。陣屋が設置されるとともに上町が成立し、六斎市が3町に割り振られた当時は、上町南部の奥行きが規則正しく整った部分は建設されていなかったと考えるのが妥当であろう<sup>54)</sup>。そして、寛永12年の検地は、上町南部の町並みの成立と関係したものであったと考えられる。

明暦元年(1655)の大宮町は、「町並本人家百五拾三軒、町長九丁半」の規模をもつものであった<sup>55)</sup>。『新編武蔵風土記稿』においても、「市立ある所凡九町半余」という記載がある<sup>56)</sup>。戦国末期以降の段階的な拡大を経て、明暦元年には元禄絵図にみられる規模の町が形成されていたのである。

近世における町の拡大は、南への町並みの延長

に止まるものではなかった。第1節で紹介した万治2年の滋眼寺文書に、次の記載がある。

一、御陣屋裏ニ秩父三十四ヶ所之内拾三番め観音堂一ヶ所御座候、此堂も先年ハ久右衛門地面之内ニ御立被成候へ共、其堂廻り先年より寺之無常場ニ仕、諸且那殊ニ満光庵へ参候往來之仏■之基つき来り申候、其上秩父観音初り満光庵寺初り申以來満光庵住寺掃除破損致堂別当ニ相極り罷有候所を、此度久右衛門子惣兵衛・七右衛門と申者、先月廿七日右之堂満光庵を取はなし商売可仕たくみ致候て観音堂を釘にててうし申候(後略)

満光庵観音堂は、大宮町から横瀬をぬけて正丸峠に達する街道に平行する裏道に面していた。町の主要街道から外れたこの場所も、大宮町の商業機能の拡大にともない、商業的な価値を高めていた様子が窺える。

また、寛永21年(1644)に江戸の大曾根久左衛門が番場の水田を購入し、そこに屋敷を建てて秩父に移り住んでいる<sup>57)</sup>。大曾根久左衛門は、延宝6年(1678)に、江戸の医師であった花木斎庵を秩父に招いている<sup>58)</sup>。大曾根家や花木家の屋敷は、柳島通り(長谷部横丁)に面していた。他所からの人の流入は、新しい裏通りの形成として現出した町の拡大の源となったのである。

町の枠組みが形成された後での他国商人の流入は、町の外延的な拡大をもたらしたばかりではなかった。大宮郷の野坂に存在する野坂寺には、興味深い縁起が残っている。それは、寛永年間に甲斐国の商人がこの地で賊に襲われたが、懐中の観音に救われた。商人は観音堂を建立し、甲斐の居宅近くに安置していた観音像を運んできたというものである。この縁起に登場する甲斐国の商人とは、野坂寺の開基家となっている新井家であった。野坂寺の過去帳によると、甲斐国の商人であった初代の十兵衛は寛永15年(1638)に甲斐国で没した。2代目十兵衛が縁起に出てくる商人で、野坂寺を建立後に秩父に土着して佐次右衛門と称し、寛文5年(1665)に没したとされている<sup>59)</sup>。この

新井家は、中町東側に居住しており、下町の新井家と同族関係にはなかった。また、新井家と同じく、野坂寺の檀家で中町東側に居住していた大森家も、寛文年間に土着したとされている。こうした新たな他国からの流入者により、表通りの構成員も変化していったのである。

#### Ⅳ おわりに

本報告では、主に近世初頭の大宮町において中心的な役割を果たした者の出自や社会的性格の分析を通して、大宮町の形成過程について検討してきた。その結果、大宮町の形成過程の特徴を示すと思われる、いくつかの点を認めることができた。

天正20年の妙見社棟札や由緒書にみられる名字を、広見寺の過去帳から追っていくと、棟札に記載される当時の町は、近世の下町の原型となるものであり、妙見社の門前町としての性格をもっていたと考えられた。この町は、「宿太郎」の新井氏を中心とする町衆によって構成されており、同じく戦国期における妙見社の地盤であった宮地と密接な結びつきをもつものであった。

また、戦国期の大宮郷には、妙見社の門前町的な様相を呈する下町とは別の、横瀬今市から移転した町が存在したと考えられた。そして、この町の移転を主導したと考えられる久保家について検討を加えることにより、横瀬今市から移転した町が中町の母体となるものであり、後に中町が氏子となる八大権現社(今宮坊)と密接に関係していた可能性があることを指摘した。

次に、上・中・下の3町による近世大宮町の基本構成が確立したのは、近世初頭の慶長期であると推定された。上町の成立は、戦国期からそこを占拠していた閑野氏の大宮郷からの落居によってなされたものであり、上町は代官による六斎市の開催を念頭に置いた政策的な町立てであったと考えられた。その後、上町南部の町並みが追加され、遅くとも明暦元年には元禄絵図にみられる規模の町並みが形成されていたのである。

以上のように、大宮町は、戦国期には成立して

いた由来の異なる2つの町と、近世初頭に成立した町が一体となってできたものであると考えられる。3町が異なる地割の形態をもち、割役や名主といった町の重立の居住地の分布にも3町の間で不均等がみられるのは、このことに由来するものであったと考えられる。

代官の主導の下、3町が同時に新しく町立てされた小鹿野の場合、町の基本構成は大宮町と同じであるけれども、3町の間で大宮町ほどの差異は認められない。また、大宮町の場合、妙見社や八大権現社といった寺社が町の成立と深く関わっていたと考えられたが、これも、小鹿野にはみられない特徴であると思われる。このように小鹿野の事例と対比すると、大宮町の形成過程における特徴がより鮮明に浮かび上がるのである。

本報告においては、町の構成員の分析に終始し、先行研究においてなされた町割・屋敷地割・町屋敷の形態の詳細な復原という手法を十分に消化・活用するまでには至らなかった。また、六斎市の開催地としての大宮町の側面については、ほとんど検討を加えることができず、小鹿野にみられるような町の重立と市との関係や、市を媒介とした大宮町と他の町、さらには周辺村落との関係についても未解明のままである。それらについては、今後の課題としたい。

#### 付 記

本稿を作成するにあたり、秩父市の多くの方々にご協力をいただきました。とくに、広見寺・惣円寺・慈眼寺・野坂寺のご住職には、様々なご教示をいただきました。また、資料収集の際には、秩父市立図書館の方々に大変お世話になりました。さらに、筑波大学人文学類の國澤恒久、筑波大学大学院歴史・人類学研究科の秋吉信博の両氏には、実地調査および資料整理などにご協力いただきました。ここに記して深く感謝申し上げます。

#### 注および参考文献

- 1) 伊藤裕久(1993)：近世市町の空間形成—会津盆地の在方市町を素材として—、『年報都市史研究1

- 城下町の原型』, 山川出版社。伊藤裕久(1993): 戦国期上吉田宿の町割・屋敷地割とその変容, 『都市と商人・芸能民—中世から近世へ—』, 山川出版社。
- 2) 海津一期(1987): 鎌倉時代の郡秩序と領主制—南北朝内乱論再検討のための諸前提—, 千葉史学, 11, 19ページ。
  - 3) 前掲2), 24ページ。
  - 4) 埼玉県(1982): 『新編埼玉県史 資料編 5 中世 1』, 635~644, 「太田道灌書状写」。
  - 5) 内務省地理局編(1884): 『新編武蔵風土記稿 第12巻』(『大日本地誌体系18』, 雄山閣復刻, 1972), 200ページ。
  - 6) 平野哲也(1994): 戦国期定峰における村落社会の変容, 歴史地理学調査報告, 6, 23ページ。
  - 7) 埼玉県(1980): 『新編埼玉県史 資料編 6 中世 2』, 136ページ, 「北条氏康判物」。
  - 8) 大宮郷内では, 妙見社や今宮坊に「武田焼き」の伝承が残っている。
  - 9) 前掲6), 24ページ。
  - 10) 事例として, 中村(秩父市中村)の井上家, 中宮地(秩父市中宮地)の根岸家がある。
  - 11) 秩父市立図書館蔵, 松本家文書, 題欠(天保5年松本宗左衛門写), 以下, 「元禄絵図」と呼ぶ。
  - 12) 秩父市立図書館所蔵稿本, 関根家文書, 表題欠(以下, 「由緒書」と略記する)にも, 七つ井とそこに祀られた弁天についての記載がある。
  - 13) 第3章における松本家の伝承を参照。
  - 14) 前掲5), 185ページ。
  - 15) 第3章において紹介する滋眼寺文書により, 万治2年(1659)には陣屋が元禄期には絵図に描かれている場所に存在したことがわかる。
  - 16) 松本家文書, 「御用日記」。
  - 17) 川崎俊郎他(1994): 秩父大宮の都市形成と商業の変遷, 歴史地理学調査報告, 6, 106ページ。
  - 18) 前掲5), 189ページ。
  - 19) 前掲12)。
  - 20) 井上家のみは金仙寺(秩父市下影森)の檀家である。
  - 21) 広見寺での聞き取りによる。なお, 川田家は現在は見られないため居所は不明である。
  - 22) 墓地寺の側では, このような檀家のことを「墓壇(はかだん)」と呼んでいる。
  - 23) これらはいずれも広見寺の末寺である。
  - 24) 滋眼寺文書。
  - 25) その他にも, 年号は未記載であるが, 「新井織部」という記載もある。
  - 26) 滋眼寺文書。
  - 27) 川越市総務部市史編纂室(1977): 『川越市史 史料編 近世 2』, 14ページ。
  - 28) 前掲5), 178~179。
  - 29) 横瀬町教育委員会・横瀬町文化財保護審議会編(1993): 『横瀬町の文化財』, 28ページ。
  - 30) 秩父市立図書館蔵, 高野家文書。
  - 31) 秩父市立図書館蔵, 久保家文書。
  - 32) 今宮神社での聞き取りによる。
  - 33) この「久保庄左」は「久庄」の先祖と考えられるが, 詳細は現在までのところ不明である。
  - 34) 前掲5), 191ページ。
  - 35) 前掲4), 650~651, 「秩父札所番付」。
  - 36) 今宮神社での聞き取りによる。
  - 37) 今宮坊は, 近世において秩父郡年行事職であった(宇高良哲編(1985): 『近世寺院史料叢書 4 武蔵越生山本坊文書』, 東洋文化出版, 94ページ)。戦国末期においては, 山本坊が秩父六十六郷の熊野先達職ならびに年行事職にあった(前掲7, 431ページ, 「聖護院門跡御教書」, 719ページ, 「北条氏邦印判状」)ことから, 今宮坊は山本坊の配下であったと考えられる。これより, 中世の秩父地方における熊野修験の動向にも眼を向ける必要があると思われる。
  - 38) 前掲17), 105ページ。
  - 39) 横瀬村(1982): 『横瀬村誌 資料編(3) 江戸期文書第3集』, 342ページ。
  - 40) 矢尾新之助編(1972): 『温故集録』, 3~4。
  - 41) 惣円寺での聞き取りによる。
  - 42) 前掲7), 661ページ, 「北条氏邦印判状写」。
  - 43) 前掲7), 544~547, 「北条氏邦印判状写」。
  - 44) 池上祐子(1991): 戦国時代の武蔵における開発, 『開発と地域民衆—その歴史像を求めて—』, 雄山閣, 127~128。
  - 45) 閑野帯刀という人名は, 第2章において紹介した, 滋野刑部の子の帯刀が農民となって大宮郷に移転したという伝承を思い起こさせる。その後大宮郷を闕所・退転するという点でも共通していることから, 同一人物である可能性が高いと思われる。
  - 46) 同様の事例は, 小鹿野町においてもみられた。「小鹿野由緒書」によると, 戦国期から小鹿野村の大家であった林新左衛門が闕所となり, その屋敷地を落札した吉田左馬助が小川(吉田町小川)から小鹿野に移り住んでいる。
  - 47) 松本家文書, 「諸用集」。
  - 48) 松本家文書, 「大宮郷御朱印地始寺社境内間数并堂庵宮小社石地藏道印等迄御改書写」(文化6年)。
  - 49) 前掲47)に「大宮郷御繩之義ハ寛永十二年亥五月五日より十二日迄二御座候」とある。
  - 50) 片山家文書, 「大宮郷宝永七年改事」。
  - 51) 前掲5), 175~176。
  - 52) 秩父郡教育会(1925): 『埼玉縣秩父郡誌』, 447ページには, 代官所は元来下町西方の字「下平」にあっ

たと伝えられる旨が記載されている。これより、上町の成立とともに陣屋が移転したことも考えられる。

53) 前掲17), 4ページ。

54) 伊藤は前掲1)の論文において、市立を想定した町割における各町の長さの均等性について言及している(65ページ)。

55) 前掲50)。

56) 前掲5), 186ページ。この9町半というのは、元禄絵図における町の長さにはほぼ該当する。

57) 片山家文書, 「手形之事」。

58) 片山家文書, 「指上ヶ申手形之事」。

59) 野坂寺での聞き取りによる。